

〈時代往還〉 松本清張とその時代

〈第四回〉

高橋新太郎

十五歳の松本清張が、川北電機株式会社小倉出張所給仕として職を得た年の翌年、大正十四(一九二五)年は、近代日本の思想文化のうえで大きな節目となる年であった。四月二十二日には治安維持法が公布(五月十二日施行)され、国体の変革、私有財産制度の否認を目的とした結社の組織、加入、その実行のための協議、煽動、その目的のための金品供与などを罰し、最高十年以下の懲役・禁固に処した。五月五日に公布される「普通選挙法」と抱き合わせて制定された特別刑法で、共産主義をはじめ、いっさいの反政府的思想を抑圧し、犯罪の対象としたところに特徴があった。昭和三(一九二八)年、三・一五事件を契機として、六月二十九日に緊急勅令により、最高を死刑、結社を援助する行為を広く禁止する改悪をおこない、その後の思想の自由と労働運動・社会運動全般にわたって大きな圧迫をくわえた。

普通選挙法案議院議員は、従来の、財産・居住制限を撤廃し、二十五歳以上の男子に選挙権を付与するものであったが、女性・朝鮮人・台湾人をはじめ貧困に困り、生活のため公私の救助を受け、又扶助を受ける者や、一定の住居を持たない者、季節労働者には選挙権が与えられなかった。しかし、この普通選挙法に

より、有権者数は従来の三百三十四万人から、千二百四十二万人となり、四倍増となった。

いっぽう、この年の七月十二日からは、東京放送局が本放送を開始し、年末にはラジオの普及が二十五万八千台に達する。電波という目に見えない一つの波が、人びとの心をつよく、広くとらえる。ラジオ文化・放送文化の登場である。「讀売新聞」がラジオ版を創設するのは十一月十五日である。

関東大震災後のジャーナリズムの復興はめざましく、「大阪朝日」、「大阪毎日」の東京への本格的進出を呼び夕刊も発行され、欧米の大型高速度輪転印刷機や高速グラビア輪転印刷機の導入によって新聞の量産化体制が確立する。鳴尾から新設の甲子園の球場に舞台を移した全国中等学校優勝野球大会の爆発的人気によっても部数を伸ばし、ラジオの放送も、ニュースをもう一度、目で、活字で確かめようとする人びとの心理を誘い、新聞の大衆化を進めた。大正十三年には、「大阪毎日新聞」は百万の発行部数をほこり、「東京日日新聞」も八十万部に達し、「大阪朝日新聞」も同じく百万部を越した。

雑誌ジャーナリズムも、「週刊朝日」(旬刊朝日改題)、「サンデー

毎日」がともに大正十一年四月二日号から総合週刊誌として競い合う。「週刊朝日」創刊号の印刷部数は三十五万部であった。「女性」(大11・5、大阪・プラトン社) 菊池寛編輯の『文藝春秋』(大12・1 文藝春秋社) 『苦楽』(大13・1 プラトン社) 『キング』(大14・1 講談社)などの月刊誌も相次いで創刊され、とくに大日本雄弁会講談社の『キング』は、(日本一)おもしろい、日本一(為)になる、日本一(安い)雑誌(を)読みたい文句として巨額の宣伝費用を投入、創刊号は、増刷し最終的に七十四万部を記録した。引き続き発行部数百万部を突破し、国民雑誌としての地歩を固め、『雄弁』(明43)『講談倶楽部』(明44)『少年倶楽部』(大3)『面白倶楽部』(大5)



菊池 寛

『現代』(大9)『婦人倶楽部』(大9)『少女倶楽部』(大12)『幼年倶楽部』(大15)とともに、大衆文化を基盤とした雑誌王国を築いた。このようなマス・メディアの発展を背景として、いわゆる「大衆文学」の興隆期を迎える。大正十四年には白井喬二を中心到大衆作家的会「二十一日会」が結成され、機関誌『大衆文藝』(大15・1)が発刊され、また白井のプランに成る『現代大衆文学全集』(第一期・第二期合わせて60巻・昭2〜平凡社)も刊行され、円本ブームの一翼を荷うこととなる。

松本清張の川北電気給仕時代の読書生活に戻ろう。

川北電気にいる三年間、私は主に読んだのは、その頃出ていた春陽堂文庫や新潮社の出版物だった。殊に芥川龍之介のものは真先に読んだ。当時、芥川は短篇集をつづけて出していた。その短篇集「春服」「湖南の扇」など、銀行などに使っている椅子に腰かけて待つ間のひまに、貪るように読んだ。なるべく長く待たされるのを望んだ。

(「途上」―「半生の記」)

清張は、明治の作家では、漱石、鷗外、花袋、鏡花などを読んだが自然主義作家には、あまり惹かれなかったという。花袋の場合でも、「蒲団」「兵卒」よりも、旅への憧れから、花袋の紀行文のほうに惹かれたという。私小説の系の作家のものは好みに合わず、評判の高かった志賀直哉の「暗夜行路」もそれほど魅力は感じなかったという。むしろ「和解」のほうに感動したともいい、「網走まで」「小僧の神様」「城の崎にて」などは、どこがいいのか分ら

なかつたという。そういう清張が、小説らしい小説として、芥川や菊池寛の作品に興味を惹かれるのは、自然の成り行きでもあったろう。菊池の「啓吉物語」や芥川の「保吉の手帳から」は同じ私小説の系統でありながら、自然主義作家のものよりずっと面白かつたとのべている。

松本清張は随筆集『黒い手帖』に収めた「私の古典」でも、菊池寛の「啓吉もの」への親愛を語り、△「大島が出来る話」「啓吉の誘惑」「妻の非難」「R」などは、今でも文章の一部を暗記しているくらいである。▽と言いつつ、また△僕がいま歴史物を書くようになったのも菊池寛が眼を開かせてくれた▽とも語っている。

「回想的自叙伝」(『文藝』連載、昭和38年12月)の△見習い時代▽でも、△芥川の才気も愛し、菊池の現実主義的な見方にも共感を覚えた▽と両者への傾倒を記したうえ、芥川初期の『今昔物語』に取材した作品を△机前の観念作業▽として斥け、その△脆弱さ▽を言い、いっぽう菊池の自伝的な「啓吉物語」や初期の「身投救助業」「若杉裁判長」「忠直卿行状記」などの作を挙げて、△新鮮な着想が現実性と融合している▽と称揚し、こう記す。

芥川は、「芸術的な」空想の枯渇に瘦せ細り、菊池は、彼の現実的な眼(私小説作家のような愚かしい自己生活中心ではなかつた)をますます肥やして、その物語性が後年の新聞小説、婦人雑誌のつづきものなどに入らせてゆくのである。

「忘れられない本」は、昭和五十一(一九七七)年五月から五十四年三月まで、毎週一回、「朝日新聞」(東京本社管内と北海道地区)

認で立候補する。△なんといつても無産政党は現代の大義名分である。いはは、錦の御旗である。その方から三度呼びかけられた以上、たとひ自分が適任でないことが分りきつてゐても、応じないことは、何だか男冥利に尽きるやうな気がした▽と立候補の弁に記している。定員五名であったが、菊池は十五名の立候補者中、七位で落選した。得票は五千六百八十二票であった。

この第一回普選で、『何が彼女をさうさせたか』の作家藤森成吉も、労働農民党から長野三区で立候補し、三木清や藤原惟人らも応援に駆けつけたが落選した。当選者の内訳は友友会三百七十七名(四、二五〇)、八四八票)憲政党二百十六名(四、二七〇、四九七票)無所属十七名(六〇七、二二九票)革新クラブ三名(九二、二五〇票)実業同志会四名(二六六、二五〇票)社会民衆党四名(二二〇、〇四四票)労働農民党一名(一九三、〇二七票)日本労働党一名(九一、一七〇票)地方無産党一名(四〇、一三三票)日本農民党〇名(三五、七五〇名)で、無産政党五派の得票総数は四十八万票を超え、次点十名であった。最も左よりの労働農民党が無産派政党の中ではもっとも多く得票し、京都一・二区で水谷長三郎、山本宣治を当選させ、社会民衆党は、東京二区で安部磯雄、大阪三・四区から西尾末広と鈴木文治、福岡二区で亀井貫一郎、日本労働党は兵庫一区で河上丈太郎が当選し、九州民憲党からは福岡二区で浅原健三が当選した。ちなみに記せば、この時四区(門司・小倉)で労働農民党から立候補した徳田球一は、一、四四六票で落選する。

菊池寛と社会民衆党との由縁を記せば、震災後の社会主義運動の閉塞状況の中で、アナキストをも含む左右両派合同の一種の抵抗線として安部磯雄・山崎今朝弥の主動によって、△あらゆる社

の読書欄に連載され、第一回の松本清張から最終回の大岡昇平まで各分野の九十六名が執筆したが、そこでも清張は「忘れられない本」として菊池の「啓吉物語」を挙げ、△自分のやるせない少年時代▽、この作に△どんなに活力を与えられたかもしれない▽と述懐している。ちなみに清張が古本で読んだという改造社版の「啓吉物語」の題句と題字は芥川のもので、表紙に「元日や啓吉も世に古筆筒」の句が記されている。

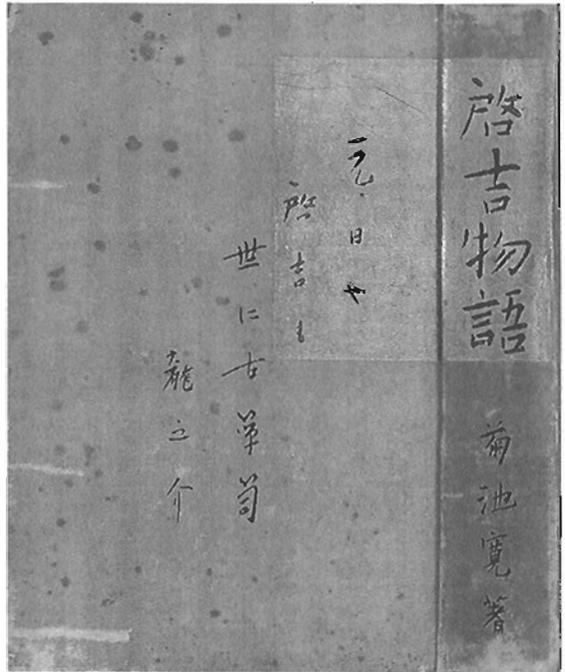
松本清張は晩年、菊池寛の郷土高松での講演「菊池寛の文学」でも、菊池の文学形成の過程に及ぼした大きな要素に△家庭が貧しかったこと▽の「逆境」を挙げ、菊池寛と自分との境遇の相似と△感情の共通▽を強調している。

大正八年、菊池寛は、社会部記者だった時事新報社を退職、芥川龍之介とともに「大阪毎日新聞」の客員となり創作に専念することになり、同紙に「藤十郎の恋」(4・3・4・13)、「友と友の間」(8・18・10・14)を発表する。大正九年には、「作家凡庸主義」で「天分論を主張する里見淳と論争し、長編「真珠夫人」(6・9・12・22)「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」が評判を取り通俗小説への記念碑的作品として道を拓いた。その後も同じく同紙に「火華」(天11・3・26・8・23)、「陸の人魚」(天13・3・26・7・14)を、大正十四年には、雑誌「婦女界」に「受難華」(天14・3・4・15・12)、「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」に「第二の接吻」(7・30・11・4)を連載する。まさに菊池寛は、マス・メディアを背景とした寵児であり、女性読者を開拓した時代の作家であった。

昭和三年二月二十日、先に公布された普通選挙法による第一回選挙が田中義一内閣のもとで行われた。菊池寛は、社会民衆党公社会主義思想にたいして寛容▽であり△同様の志向に立つものを徒に異端視▽せずに、漸進的に社会民主主義的結果を目指す「日本フェビアン協会」を設立、石川三四郎・小川未明・木村毅らとともに菊池寛もこれに参加しており、その縁から社会民衆党委員長安部磯雄の呼びかけに応じたものである。この第一回普選では、同じ社会民衆党から立候補した片山哲も落選している。イギリスのフェビアン協会は、バーナード・ショー、シドニー・ウェップらを中心に一八八四年に結成されていた。普通選挙法が実現して、いわば寄り合い所帯であったフェビアン協会から、右派が安部を中心にして社会民衆党を、左派は大山郁夫を委員長にして労働農民党を、中間派は麻生久を中心として日本労働党へと三つに分かれて選挙をたたかいたのである。

松本清張は、前出「回想的自叙伝5」で、菊池寛が「文壇的な支配者」にならず、また「生活の潤沢」に恵まれなかつたなら、初期の菊池の理想社会主義的な考え方からすれば△あるいは日本のプロレタリア小説は、一人の有力な作家を加えたかもしれないのだ」と言い、菊池のもつ△はっきりしたテーマ、彼の物語性は、現在に至るようなプロ文学の衰弱を来さないで済んだかもしれない」とのべ、プロレタリア文学興隆の前にして、芥川は自己の「創作の衰頹を早めさせたが菊池だったら、プロレタリア作家の指導的立場に成りえたかもしれない」と、その可能性を指摘している。

日本のプロレタリア文学の△偏狭なりアリズム▽が、ブルジョア文学の△私小説的弱点▽に同化して、労働体験を至上とする体験主義の弊を産み、プロ文学を硬化化させて、私小説と同じ枯渇



『啓吉物語』(大13・2・15 改造社)

の道を歩ませたとの反省から、松本清張は菊池文学のもつテーマとその八物語性Vを評価し、称揚するのである。

昭和四年一月から、最初の『菊池寛全集』全十二巻の刊行が始まる。一冊一冊、平凡社の円本全集として、菊池にふさわしく八最高作品は芸術的であり大衆的であるVをキャッチフレーズとして売り出された。この後、昭和六年八月に、改造社版の『菊池寛全集』全三巻が刊行され、昭和八年には平凡社版の『続菊池寛全集』十巻が刊行される。戦後、菊池の十三回忌を機に、昭和三十五年三月から文藝春秋版の『菊池寛文学全集』全十巻が刊行され

の盛場として描いたその恋愛小説によってであると指摘し、この菊池寛における「恋愛」に「犯罪」を代置したのが松本清張の推理小説であり、そこにこそ清張の大衆性があり、八社会派Vと名づけられるゆえんもある、とする秋山駿の意見もある。

また年譜を頼りに松本清張十八歳の年に戻ろう。昭和二年(一九二七)は、金融恐慌の年である。若槻礼次郎憲政党内閣の蔵相片岡直温が衆議院予算委員会での野党の追及に八きよう正午ごろにおいて東京渡辺銀行がとうとう破綻をいたしましたVとつい口をすべらした三月十四日の失言を引き金として、翌日から二十二日にかけて、取り付け騒ぎを起し、東京・横浜の中小銀行十三行が休業に追い込まれ、更に四月五日には、中国・台湾貿易中心の大商社鈴木商店の破綻と、台湾銀行の鈴木商店への多額の不良貸付が暴露され、十八日には、日本の植民地経営に重要な役割をこなっていた特殊銀行台湾銀行が全店休業し、これが発火点となって、金融恐慌は地方にも波及した。四月二十一日には、華族銀行と称された東京五大銀行の一つ十五銀行までもが支払い停止となり、この一か月余りの間に二十五行の銀行が休業を余儀なくされ、そのあおりで多くの会社が倒産した。若槻内閣が退陣し、田中義一政友会内閣が成立、高橋是清蔵相が三週間の支払猶予令(モラトリアム)を、緊急勅令として公布施行したのは四月二十二日であった。

川北電機もこの不況下に倒産し、松本清張は失職する。

私は何もしないでぶらぶらした。職を見つけるにも雇ってかれるところが無かった。(中略)

だが、松本清張はその推薦のことばの中で、ものの考え方、小説の構成、文章を、菊池寛によって最初に教えられたのであり、いま私の文章は、菊池寛の影響であり、歴史小説が好きになったのも菊池寛のお蔭だと述べ、菊池寛がバーナード・ショウに心酔したように私も菊池寛に心酔したと言い、菊池に倣って八顔も洗わず、風呂にも入らない生活をしばらくつづけたことがあるVとも記した。松本清張は、「あなたの文学的信条は？」との問いに、八美しい文章より真実の文字をVと答えたことがあるが、これも、菊池寛譲りの言と見てもよからう。

好著『清張ミステリーの本質』(一九八四年光文社)で安間隆次は、改造社の円本「現代日本文学全集」の『菊池寛集』の八全集の序としてV刷り込まれている自筆原稿の菊池の言葉(八文芸は、実人生の地理歴史である。いかなる処にいかなる悲惨と罪愆があるか、いかなる生活にいかなる喜びと苦しみがあるかの地理である。同時に、人間が夫婦生活を、恋愛生活を、肉親との交渉を、いかに生活しいかに苦しみいかに受用したかの歴史である。実人生に処せんとする人々には、知らず知らずまじき人生の地理歴史である。)を引用して、松本清張の「わたしの古典」を読んだとき、菊池寛のこの短い文章が、清張ミステリーの本質を言い当てている核心をつく言であることに気付いた旨を記したうえで、その著の第一部「人間万華鏡」第二部「さまざまの意匠」第三部「風土と楽天性と矜持」の各所で、寛と清張との類同と差異を照らし出している。

菊池寛の文学が、ホワイト・カラーとしての都市生活者の子弟に圧倒的な影響力を持ったのは、二つの階層間の落差を「恋愛」小倉に東洋陶器というコピー茶碗や洋食皿を造っている会社がある。その職工で私と同級生の男がいた。その男の伝手で私よりは十ぐらい上のHという職工と知り合いになった。この男も文学青年で、小説は書かないが、みずから詩人といっていた。しかし一度もその詩を見たことがない。彼の家に遊びにゆくと、私には羨しいくらい立派な本が書架に並んでいた。

さらに、そのHの仲間に八幡製鉄所の職工数人がいた。いずれも私よりは七つか八つ年上の男で、彼らは実際に小説を書いていた。そんなことから私はこういう人たちとつき合うようになり、ときどき自分の書いた短いものを見せたりなどした。その頃の私は多分に芥川の影響を受けて、そういう傾向のものを書いたようである。もっとも、その習作は一つか二つだった。(中略)今でもうろ覚えに記憶しているのは、そのとき私の披露した短篇は、朝鮮で飢饉が起り、人民が土でつくった饅頭を食べる話であった。むろん架空である。プロレタリア意識から書いたものではもちろんなかったが、それを聞いた八幡製鉄所の連中は、当時勃興していたプロ文学の作品系列だと見当違いなほめ方をした。(半生の記「途上」)

清張の小学校の同級生が職工をつとめる東洋陶器が小倉に出来たのは大正六年五月で、初代社長は日本陶器の社長大倉和親で、小倉を選んだのは、原料の陶土を朝鮮から運ぶのに便利なことと、燃料の石炭を筑豊炭田にたよれること、また海外輸出には、中国・

朝鮮・東南アジアの貿易港司が近いことなどによる。大正十五年三月の小倉職業紹介所の統計によれば、小倉市内の小学校卒業生の内、東洋陶器への就職がいちばん多かった。

川北電気の給仕時代に始まる、いわば文学青年的読書生活の営みの中で、文学入門、小説作法の手引書として愛読したのが、木村毅の『小説研究十六講』（大正十四年一月初版、新潮社、定価二円五十銭）であったことは、松本清張によつて再三語られている。

これについては、尾崎秀樹の『木村毅の『小説研究十六講』』（松本清張研究 創刊号）に詳しい。外国文学への眼もこの書の刺激を受けて拓かれていったと思われる。松本清張が手にしたのは大正十四年十二月発行の第十三版で、買ひ求めたのは昭和二、三年の頃という。木村毅には、これに先立つ『小説の創作と鑑賞』（大正十三年九月、新詩壇社）の著もある。

戦後、作家的出発を果した清張は東京に移ると早速木村毅を訪ねて親交を結んだことは、前々回で触れたが、『小説東京大学』や『文豪』などの作は、木村の資料の提供によつて成ったものである。

昭和三年清張は、母親の言う八手に職をおぼえるため、小倉でいちばん大きな高崎印刷所に石版印刷の見習職人として職を得、十円程度の給料を得るが、この年さらに別の小さな石版印刷所の見習となる。その主人が画工でもあるので、版下書きの特殊技能を身につけようとしたことだった。小学校の時から図画が好きで級で一番の成績だった絵の才能を活かせる道として広告図案の世界をも知ることになった。

父の飲食店経営も不況で困難となり、紺屋町を追い立てられて、中島通りに移つて営業することとなる。再び『平生の記』を引こ

られている父を見てみると、いつそうそう決心せずにはいらなかつた。
（同、「見習い時代」）

この小倉署の共同房で、婦女誘拐、窃盗、詐欺の容疑者と、ひとり思想犯容疑者としてともに留置され、十数日を過ぎた経験は、小説家松本清張の重要な「原体験」として、「犯罪」を核とするその後の清張文学に陰に陽に生かされてゆく。

前にも引いた古賀良一編の『北九州地方社会労働史年表』の昭和二年九月十二日の項に次の記載がある。△日本プロレタリア芸術聯盟福岡支部創立大会、福岡第一公会堂で開催。芸術家聯盟排撃など数件を決議。議長永元光夫・書記長村田健治。また十一月二日の項には、△プロレタリア文学研究会主催、文芸講演会を若松市上尾町説教所で同好約50名の出席をえて開催。若松署、公安を害するとして解散を命じ大坪久雄他22名を検束する。▽とある。「大阪毎日西部毎日新聞」北九州版の記事に拠るものだが、十一月十四日の項には、△八幡（地方）無産団体協議会により、全日本プロレタリア芸術聯盟八幡支部発会式を八幡市通町の正念寺で挙行。議長井上易義書記松本久次郎、その他九州地方評議会員ら約20名参加。友誼団体、労農党小倉支部・九州鉄工組合・労農党八幡支部などで、参加者の大部分は八幡製鉄所従業員。▽とある。これは、「八幡製鉄所労働運動誌」に拠つたものである。

九月十二日のプロ芸の福岡支部創立大会における△芸術家聯盟排撃▽は、「労農芸術家聯盟」（略称労芸）に対するもので、「日本プロレタリア芸術聯盟」は、大正十五年十一月十四日に、従来のプロレタリア文学・芸術諸派の統一的な共同戦線をうたった「日

う。

昭和四年の三月の中旬のある朝、私の家に刑事が来て、まだ私が寢床にいるところを引っぱられた。（中略）何のために引っぱられたかさっぱり分らなかつたが、多少の心当りはあった。というのは、前にも書いたように、八幡製鉄所の文学仲間が非合法出版の「戦旗」の配布をうけて読んでいたから、八幡署の特高にマークされていたのである。その往来から、私もグループの一人だと思われてつかまえられたのだとは思っていた。あとで家宅捜査をしたが私の貧弱な本棚からは何一つ彼らの餌になるようなものは発見されなかつた。（中略）拷問は竹刀だった。これは私を捕えに来た近藤という酒焼けのした男だったが、どうしても仲間の名を言えといつてきかない。留置場のすぐ上が道場で、殴るぶんには遠慮がいらぬ。私の場合は容疑がうすいとみてか、逆吊りや、煙草責めなどはなかつた。

留置場には二十日間入れられた。（中略）出てきたときは桜が咲いていた。母は泣いた。釈放されてからも、近藤という刑事はたびたびやってきた。（中略）

留置場から家に戻ってみると、私の本はことごとく父に焼かれてしまつていた。（中略）こういうものを読んでいるから思想にかぶれるのだといい、それ以後、私が小説を読むのをことごとく禁じた。

しかし、私も文学などやっていられない、早く生活を安定させなければ、一家が路頭に迷うと思つた。借金取りに責め本プロレタリア芸術聯盟（略称プロ連）から、アナキストや非マルクス主義者を排除して、改称成立した団体で、鹿地亘・中野重治らがその先鋒であつた。労芸は、昭和二年六月十一日、プロ芸から脱退した青野秀吉・山田清三郎・林房雄・蔵原惟人・葉山嘉樹らと藤森成吉・黒島伝治・里村欣三・平林たい子らが結成した団体で、七月から「文藝戦線」を機関誌とした。いっぽう、中野らのプロ芸は「プロレタリア芸術」（昭和二年七月〜三年四月）を創刊する。

さらに昭和二年十一月十二日には、労芸を脱退した蔵原惟人・林房雄・藤森成吉・佐々木孝丸・村山知義・山田清三郎らが前衛芸術家同盟を結成し、機関誌『前衛』（昭和三年一月〜四月）を創刊する。機関誌「文藝戦線」に山川均の福本一夫批判の原稿「あ



「戦旗」（昭和3年11月号）

る同志への書翰、掲載の可否をめぐる対立、山川支持派と批判派に分れ、脱退に至った。

そして、昭和三年三月のいわゆる三・一五事件の弾圧を契機として全日本無産者芸術連盟（略称ナツプ）が成立する。五月創刊の機関誌『戦旗』巻頭の「日本プロレタリア芸術聯盟・前衛芸術家同盟合同に関する声明」文の日付けは、三月二十五日であった。

これに先立つ三月二十日には、プロ芸本部全員が官憲によって検束されている。プロ芸・前芸の二団体は、政治的、思想的には労働党及び非合法下の前衛組織、共産党を支持しており、三・一五の弾圧が、その戦線統一を早める結果となった。

五月二十九日に『戦旗』は早速第二号が発禁処分を受け、十一月三十日には、十二月号の小林多喜二の作「一九二八年三月十五日（二）」が安齋秩序紊乱の罪で発禁処分を受ける。

先に記したように、最初の普通選挙は、田中政友会内閣下で、官憲などによる露骨な選挙干渉と買収工作にもかかわらず、民政党との差はわずか一票という不安定このうえない結果に終り、無産政党も四十八万を超える投票をかさね、ことに合法左翼政党としては最左翼の労働党が、無産政党中では最大の十九万三千票余りを集めたことは、田中義一内閣に深刻な危機感をつのらせることとなる。

共産党が、労働党を通じて徳田球一らの候補者を立て、党の署名入りのビラを配布するなどしてその存在を明らかにし、非合法中央機関紙『赤旗』を創刊したのも、選挙戦の最中の二月一日であった。「創刊の辞」はいう。「日本プロレタリアートの最も優秀な、最も戦闘的な前衛分子の革命的隊伍たる日本共産党は、過去

中心スローガン

天皇と結びついた資本家と地主の議会を破壊、労働の民主的議会をつくれ!!

労働者に職と仕事を与えよ!!

大土地を没収せよ!!

労働大衆は日本共産党の旗のもとに戦へ!!

労働党から立候補した四十名の中、十一名が日本共産党員であった。

唐沢清八（東京第四区）、秋和松五郎（東京第五区）、南喜一（東京第六区）、杉浦啓一（静岡第一区）、清原一隆（奈良）、近内金光（兵庫第二区）、難波英夫（岡山第二区）、井之口政雄（沖縄）、山本懸蔵（北海道第一区）、荒岡庄太郎（北海道第二区）、それに前述した小倉を中心とした福岡第四区の徳田球一である。徳田は大正十五（一九二六）年十二月、渡辺政之輔・福本和夫らとモスクワに渡り、一九二七年七月にコミンテルン常任執行委員会が採択する「日本に関する決議」いわゆる「二七年テーゼ」の協議にもくわつてもいた。徳田が検挙されるのは、昭和三年二月二十六日、選挙が終り、東京へ赴く途次の下関で検挙される。戦後におよぶ獄中十八年の始まりである。

三月十五日未明を期して、政府は選挙違反の取締活動を装って、共産党に関わりありそうな左翼活動家の一斉検挙と捜索を行う。一道三府二十七県にわたつて、千五百六十八名を逮捕した。いわゆる三・一五事件の大弾圧である。小樽での検挙拷問の生々しい状況は、発禁で触れた先的小林多喜二の作品「一九二八年三月十

七年にわたり、常にあらゆる闘争の先頭に立つてきたが、今日はいじめ、この『赤旗』を通じて大衆の前に公然現はれ、プロレタリアートの厳格なヘゲモニーの下に、全労働民衆のあらゆる革命的闘争を指導し組織する任務を最も忠実、最も勇敢に遂行せんとするものである。日本共産党は、この『赤旗』を手にする、あらゆる革命的労働者貴族諸君を通じて、最も広汎なる大衆に向つて、吾党の革命的政略を告げる。あらゆる工場、あらゆる農村において闘争する諸君は、ブルジョア及び地主を徹底的に打ち倒す政治的基準を学びとるであらうと。

そして、選挙にのぞむ政策と中心スローガンを次のごとく宣言した。

政策

民主制の撤廃

労働の民主的議会の獲得

男女十八歳以上の選挙権被選挙権獲得

言論・出版・集会・結社の自由

一切の反労働者法の撤廃

団結権・罷業権・示威運動の自由

失業手当法の獲得

大土地所有の没収

所得税・相続税・資本利子税にたいする極度の累進賦課

帝国主義戦争反対

ソビエトロシアの防衛

植民地の完全なる独立

五日」に活写されている。

（たかはし しんたろう・学習院女子大学教授）